



矢成光生は1969年生まれ、1997年に多摩美術大学大学院美術研究科絵画専攻を修了している。1993年から2001年まで、毎年個展、グループ展において旺盛に作品を発表した。12年ぶりの個展となる。

矢成は今回大型作品を3点、中型を5点、小型を15点出品した。それぞれには明確なタイトルが付けられている。油彩が16点、コラージュが5点、ミクストメディアが2点であるとおり、矢成は油彩を中心に作品を制作した。

大型作品に目を向けてみると、描かれているのは空と雲にグリッド、フリーライミング用の人工石、同じく人工物としてのテントと、恐らく矢成が日頃見慣れている風景が動機となっていることが予想される。

日常の風景を切り取ることで、それは今日では当たり前のことと認識されているが、印象派が粉本を捨て野外にイーゼルを立てたことに始まり、第一次世界大戦時にドイツ・ダダとロシア・構成主義が抽象で探究し、1950年代にR・ラウシェンバーグらが確立した近現代の方法論である。

コグレマサトによるとtwitterとは「「今」を共有するから「今」だけを表示すればいい」(2009年)。C・パトラーによるとラウシェンバーグの《小さな判じ絵》(1956年)に

コラージュされうるものは「現代の都会の状況において芸術家が簡単に手に入れられるもの」しか共通しないという。

つまり目の前にあるものを見る「いま、ここ」の思想とは、実は「私が見ている」現象を消滅させることであることに気が付く。フォロワーによる各人異なる頁、瞬時に変化するtwitterの画面とは、画面ではなく見ている自己の喪失を物語っているのである。

E・フィンクは「いま、ここ」を更に明確にするためには「そのつどのもの」が必要であることを強調する(『人間存在の根本現象』)。矢成の油彩に立ち戻ると、矢成の今回の作品には正にこの「そのつどのもの」が立ち現れているのを発見することができる。過去のポートフォリオはもう必要ではないのだ。

小品に目を向けると、色面やグリッドをコラージュして、「そのつどのもの」を何とか捉えようと画策する姿が浮かび上がっている。これらの試行錯誤が油彩へ還元されると、その画面の表面には矢成がこれまで培ってきた思想が浮かび上がってくる。

矢成はこれからも絵画を制作していくという。制作すればいい。制作するといい。「そのつどのもの」を掴むのだ。

